



絵と文・山本絢子



54

麻生区  
文化協  
会報

## 高石神社

久しぶりに高石神社に詣でた。3月上旬にしては温かく、海拔130メートルの坂道は心地よかった。社殿を囲むように針葉樹林があり、木の香りがかくわしかった。境内には地元の俳句グループの句碑がたくさんあった。地域の人にとっては今も昔も鎮守の森で、親しみを込めて「お伊勢の森」と呼び、神社に寄せる思いは格別のようなだ。

社殿は昭和59年に竣工されたものであるが、神明造の美しい建物である。古くは出雲大社や伊勢神宮に見られる伝統的な切妻造であるが、平入り、妻入りを折衷させるなど、様式は今風である。

神社の縁起によると、神明社の創建は1634年、時の地頭加賀美金右衛門尉正吉とご神体に記してある。ほかに高石地内には熊の三社・春日社・八幡宮の三社があったが、明治の一村一社令により、大正11年になって、村の四神社を合祀し、その時から高石神社の名称になった。神明社・熊野社の建物は解体され、その用材を使って合祀された高石神社の三殿を造営したとある。以来60有余年が経過し、建物の老朽化が激しくなって、昭和58年に信徒会の総会を開き、社殿の造営が決められ、翌59年11月、創建以来の大事業が竣工した。

# 麻生の三〇年とこれから あさお古風七草粥をきっかけに文化の伝承を感じる

横須賀 朝子

## パネル討論で知った麻生の歴史

昨年は麻生区が誕生して三〇周年ということ、いろいろな企画がなされました。麻生区文化協会では麻生区役所とともに区制制定三〇周年記念パネル討論会「麻生区の三〇年の歴史とこれからを語る」を主催し、麻生区の歩みを、初代区長の西村俊行さん、現区長の瀧時雅介さんをはじめ、当時各地域のとりまとめ等で尽力された小島一也さん、



区制 30 周年記念パネル討論の第 2 部の始めに行われた「かがやいて麻生」の合唱。これは麻生音楽祭 20 周年記念に公募した曲です。

中島豪一さん、山田昌一さんに麻生区誕生のいきさつや歴史を語って頂きましたが、私にとってこれらの話は、初めて知ることでした。

## 文化協会誕生のいきさつ

思い返せば山の中に突然「新百合ヶ丘駅」と小田急多摩線が登場。「区役所」ができ、市民館建設署名が始まり、それがきっかけで「麻生フィルハーモニー管弦楽団」が誕生しました。三〇年前のことです。麻生



調理室は大わらわ。九百食の七草粥の量は半端ではない。

区にオーケストラができたけれど、その他の芸術文化はまだ育てておらず、これを育てていこうという機運が高まり、翌年、「麻生区文化協会」が発足、文化芸術団体のバックアップをするようになりました。その翌年、「麻生音楽祭」も誕生しました。

今年度は麻生区文化協会の副会長を拝命し、「あさお古風七草粥の会」の調理の責任者となりました。私は、昨年まで七草粥の配食を担当していましたが、調理室でのお粥作りは初めてです。七草粥の経験が豊かな方々にいろいろと教えていただきました。自宅でのお粥作りと違って九百食を提供するとなると七草の量が半端ではありません。そのため七草から出る灰汁の多さにもびっくりしながらお粥作りをしました。

## 七草粥の調理責任者となって

今年度から文化協会の副会長を拝命し、「あさお古風七草粥の会」の調理の責任者となりました。私は、昨年まで七草粥の配食を担当していましたが、調理室でのお粥作りは初めてです。七草粥の経験が豊かな方々にいろいろと教えていただきました。自宅でのお粥作りと違って九百食を提供するとなると七草の量が半端ではありません。そのため七草から出る灰汁の多さにもびっくりしながらお粥作りをしました。

調理室で担当された方々は、初回からお粥作りをなさっていた方、数年前からの方、初めての方もあつて年齢も大先輩から私よりも一世代若い方、とさまざまですが、これから

も間違いなく「麻生の粥作り」が無事伝承して行くに違いないと安心しております。

## 文化の伝承の道筋を見た

七草粥の会場に参加して賑わいを作って頂いたお囃子、席書、童謡合唱、正月遊びにしても、伝統文化を若い方々、とくに、小中学生の方にも伝えるとか、伝統芸能を伝承しながら、それが生まれた背景をも伝える、それを踏まえた上で、麻生区のこれからは担っていくという確かな道筋が見えた感じでした。

麻生区誕生の頃から、自然の成り行きで関わることとなった麻生区文化協会や麻生音楽祭ですが、私なりの役割があるのだと感じさせられた七草粥の会でした。



あさお古風七草粥の会に参加され、楽しく粥を召し上がる麻生区の皆様。

# 麻生市民館と生涯学習と社会参加の三位一体で 「ハッピーリタイアメント」

麻生区生涯学習相談員 本玉 秀夫

## 定年はハッピーリタイアメント？

欧米には、定年退職に際して「ハッピーリタイアメント」という言葉があるそうです。一方、日本では、定年後の男性は「濡れ落ち葉」と言われ、それが昂じると時には鬱病、自殺、熟年離婚につながるとさえささやかれています。

平均寿命が延び、定年・子育て終了後、自分を主人公とする概ね二十余年余りもの自由な時間が出現したと言われています。この自由な時間をどう生きるかにこそ人生の意味があるのではないのでしょうか。

## 定年後、喪失感と閉塞感が

どつぶり会社人間であった私は、これという趣味も育んでこず、地域の住民と交わることもなかったため、「ハッピーリタイアメント」とはおおよそ縁遠い存在でした。いわゆる濡れ落ち葉状態で、生き甲斐の喪失感と、閉塞感にさいなまれていました。このような経過を経て、人間とはいか

にあるべきか、何が出来るのかと模索の日々でしたが、やがて、「常により善く生きようとするのだ。」との結論に至りました。このためには社会への関心、社会参加が大切と考えました。

その手立ての一つとして生涯学習があり、それをサークル活動に組み入れることが社会参加の促進になると思いました。当時、麻生市民館では、市教委の進める成人学級が全盛期で、いろいろなジャンルの素晴らしい講座が開催されていました。

## 市民館サークルとの出会い

退職した四月のことです。市民館の開設後間もなくから「裸婦デッサン会」と「世界の料理研究会」を主宰してきた妻が、私の背立ちを察し、市民館だより四月号をもらってきてくれたのです。それを読んで、五月からの講座に「哲学がわかる」と「初歩からの俳画」が開催されることを知りました。

「哲学」は、学生時代特に好きな学科であり、勤務先であった企業の学園の仲間と「新時代ゼミナール」という学習結社を設立した経験や、また講師が妻の知人であったこともあつて受講しました。「俳画」は、妻から絵の手ほどきを受けていたこともあつて受講しました。

しかし、成人学校の講座はオリエンテーションに過ぎず、さらに深く学ぼうと思うようになりました。そこで知り合った学友と「哲学研究会」と「俳画研究会」という学習コミュニティを結成しました。こうして、私たちは、生涯学習活動を通じて楽しみを分かち合い、社会参加することに生き甲斐と至福を得るようになったのです。

## サークル連絡会の結成と運営

当時、市教委の成人学校では、講座を終了後、さらに生涯学習として、自主的な研究会（サークル）を結成すること、および、地域社会との交流による地域の文化向上のために市民館サークル連絡会を結成することを指導していました。

麻生区でも、各サークルの自主的・公平な話し合いによって「麻生市民館サークル連絡会」が結成されました。私の主宰する「麻生哲学研究会」「麻生俳画研究会」も加入しました。加入とともに、私は運営委員に選出され、平成十一年には会長に選出され、連絡会の運営にあたりました。その後、私は、妻の看病のため平成十八年の総会で会長を辞し、現在は副会長兼事務局長として会長を補佐し、会の企画運営に関わっています。

## いまはハッピーな人生です

今、私は、「麻生市民館」、「生涯学習」および「社会参加」の三位一体である「生涯学習サークル活動」によって、欧米に劣らぬ「ハッピーリタイアメント」の生活を送っていると自負しています。私は、後期高齢者となっていますが、私の定年後の人生をハッピーに導いていただいた麻生市民館の成人学級に感謝します。



生涯学習相談風景

# 父・中村正義 今も作品の中に生きています

中村正義美術館長 中村 倫子

私たち一家、父と母と私と弟が、愛知県から、ここ川崎市細山に引っ越してきたのは、1961（昭和36）年の1月のことでした。父は日展に所属する絵描きで、中村正義といいました。前年には、36歳の若さで、日展の審査員に抜擢されていきました。ほんの数年前、十代からの持病である結核の何度目かの手術をうけ、やっと絵筆をとる体力と気力が回復してきたころでした。復活した父の多作ぶりは凄まじく、いま残る作品も、当時のものが一番多いと感じます。

そのころ父の内部でどんな思いが渦巻いていたのか、いまになっても私には定かには分かりません。生涯、三河弁を話し、豊橋のうどんが何よりの好物の父が、その故郷の温もりをあとに残して、見ず知らずの土地に、家族をつれて、移住してきたのです。なにしろ、その年に、父は、日展を脱退してしまおうのです。

なにはともあれ、父は引っ越す前から、「今度の家は山のドテッペンにあるんだ」と、まだ5歳にもならない私に繰り返し説明してくれました。「北に山を背負い、竹藪があり、南が開けている土地が、住むにはいい土地だ」と、父は自分の父、つまり私の祖父から何度も聞いて育ったそうです。ここ細山の土地は、そのイメージにぴったりの土地だったそうです。

古い茅葺き屋根の農家での暮らしは、井戸で水を汲むことから一日が始まりました。大きなバケツに何倍もの水を、リヤカーに乗せて運ぶのは、慣れない母には重労働だったでしょうが、ついて歩くだけの私にとっては、ワクワクするような仕事でした。雑木林がいたるところにあつて、落葉を踏みながらその中に一歩一歩入って、転ばないように道を選びながら歩

くことは、ほんとうにドキドキするような冒険でした。父がそんな雑木林にスケッチに出かける時には、私もついて行きます。小さなスケッチブックに絵を描いている私の写真が残っています。父の愛したこの細山で、私は幼稚園から今日までずっと暮らしてきました。

日展を退いた父は、それまで使ったこともない赤や黄の原色で薔薇や顔を描きはじめました。父が若い時に描いた風景の落ち着いた色合いの作品と、細山に来てから描きだした

原色の作品とは、同じ人が描いたの？というくらい作風が違います。それが父の作品の特徴でしょう。

母の話では、落ち着いた色合いの風景画を描いていた頃は、画室の床に絵具ひとつ落ちて、

神経質に拭きとらせていたそうです。でも、私の知っている細山のアトリエの床は絵具だらけでした。様々な色の絵具が床にびっしりと敷き詰めたようにあつたことを思い出します。

1976（昭和51）年のことです。父の体調がすぐれず、母屋を手放すことになりました。明日は買い主の方が家を見に来るといので、みんなで一生懸命に掃除をしました。買ってくださったことになったと聞いて、よかつたな、と思いました。でも、数日後にやは



1961年頃の細山 引越してきた家



1976年「顔」



現在の美術館

うのは、見る度に違って見えるようです。その時の自分の気分や、季節や、それとも光の具合でしょうか。私もそう思うことがあります。子どもの時に見た



1972年細山のアトリエで制作中の正義

り母屋でなくてアトリエの方を買っていただくことに決まったと聞いて「えっ、あんなにお掃除したのに」と、気が抜けたものでした。父はあの大きなアトリエでいつも絵を描いていました。でも、時々絵具を片付けて、手伝いの若者や家族みなどでバドミントン大会や卓球をしたものです。そのくらい大きなアトリエでした。

あれから、37年が過ぎましたが、今もお隣さんのその方は「ほんとうに細山に来てよかった」と、言うてくださいます。あの母屋でなくて、アトリエを買っていただくことを決めた時、父がいかにアトリエを手放したくなかったか。私は父の没年を超えた今になって、

父が亡くなって11年目の1988(昭和63)年9月23日に、もとの母屋をそのままに「中村正義の美術館」を始めることにしました。恐る恐る始めた小さな美術館は、住んでいた時と同じように、インターフォンを鳴らして靴を脱いで入っていただくようになっていきます。そして、作品はもちろんですが、庭の大きな泰山木や樺も見ていただいで、お茶を一度差し上げています。何度もお出で下さるご近所の方、遠方からわざわざ電車とバスを乗り継いで来て下さる方。みなさん、父の作品を楽しみに来てくださいます。どうも父の作品とい

あの作品と、なんだか違って見えたりするのです。まだ父がどこかその辺にいて、時々描きなおしに來ているのかもしれない。父は今も作品の中で生きています。この作品をたくさんの方に見ていたことが、はからずも父より長く生きることになった不肖の娘の仕事だと思っています。

平成二十四年度(十一月三日)  
第二十四回 麻生区文化協会俳句大会

実行委員長  
本玉 秀夫

川崎市長賞

落蟬の鳴き声したる軽やかな

麻生区 本玉 秀夫

川崎市議会議長賞

水鏡の雲の中より目高の子

町田市 高松 たまき

川崎市教育委員会賞

木の実落つ己が重みを音にして

港区 彦坂 秀窗

麻生区長賞

説法の僧に首振る扇風機

麻生区 小林 三千子

麻生市民館長賞

秋立つやポケット大き看護服

大宮市 冬木 レイン

川崎市総合文化団体連絡会理事長賞

みちのくの復興折る鉄風鈴

麻生区 稲田 興子

川崎市観光協会連合会会長賞

二世代の遊びし膝や敬老日

多摩区 松本 恍昭

麻生観光協会会長賞

活断層目覚めぬやうに大根引く

麻生区 大谷 榊水

麻生区文化協会会長賞

予報士の今朝の装ひ秋に入る

麻生区 石田 厚生

平成二十四年度俳句大会席題句会

席題「手」「風」当季雑詠に詠み込み

手探りで来た人生や蓮根掘る

満月を乗せて帰る手漕舟

手に取れば母の声する秋裕

もみじの手負けじと掴む千歳船

医通いの片手拝みや神の留守

手の甲の来し方語る菊手入

冬近し木曾街道は風の底

桐葉しかと明日ある手帳かな

風吹きて焚くには惜しき柿落葉

丹精に応ふ風味や今年米

八月二十八日

講師 柏原眠雨(きたごち主宰)

演題 「俳句の構造―連歌史の関連―」

九月四日

講師 太田土男(草笛代表)

演題 「俳句の三つの場」現場に

立つ・自分の場を持つ・その土地に

立つ・そして対象を重層的に見る

九月十一日

講師 山室樹声(さざなみ編集長)

演題 1 「父・山室静と昔の麻生区」

2 「さのこ狩の醍醐味」

3 「俳句雑感」

伝統文化の継承

第十回 あさお古風七草粥の会 山室 茂樹

本年も一月七日に「あさお古風七草粥の会」が区役所広場で盛大に行われた。この行事は麻生区文化協会が細山郷土資料館で行っていたものを平成16年より区役所の協力の元に現在の場所で行われるようになった。今年には区制30周年と重なり記念すべき会となった。

を摘む者など、それぞれに若菜摘みを楽しんでいる。発見に苦労した「こぎょう」も小群生地を見つけて採取できた。そして翌二月六日の前日準備では調理室に集まった20名ほどの女性陣の手で七草の調理やお米研ぎなど目の回る忙しさでした。

この七草粥の習慣は平安時代の頃から邪気払い、無病息災を願って始まったと伝えられている。さて、これまでもこの七草粥の会場の様子等については何度か「からむし」に紹介したので今回は実行委員長を通して、準備の段階の七草摘みのことなどを中心に裏方さん達の努力を紹介してみたい。

いよいよ本番の一月七日は朝九時に集合し、調理室ではお粥作り、会場ではお餅焼きも始まり、11時にスタートした会は順調に900食のお粥を配り終わり、13時に終了しましたが、地元お囃子連による獅子舞、童謡、席書、昔の遊び等の体験などで二層盛り上がった「伝統文化継承」の一日でした。

一月五日、朝10時に古沢に約15名程が集まり七草摘みは始まる。採取するのはすずな、すずしろを除いた五種の若菜である。ベテランの説明の元に、日溜まりの斜面に這い蹲つてすずなを採る者、はこべの大群を見つけて歓声を挙げる者、長靴で小川に入り一心に「芹」



一句「里山は心の寄るべ若菜摘」 樹声

## 区制制定30周年記念討論会 「麻生区の30年の歴史と これからを語る」

麻生区文化協会は麻生区役所と共に、区制制定30周年を記念して、2012年10月5日(金)の午後、麻生区役所第1会議室において、パネル討論会を開催しました。パネリストは、初代区長の西村俊行氏、現区長の滝峠雅介氏、しんゆり芸術のまちづくりフォーラム会長の中島豪一氏、麻生観光



協会相談役の小島一也氏、本会顧問の山田昌氏の5名、司会進行は菅原敬子会長です。

第1部のテーマは「麻生区の歴史を語る」です。

西村氏の話は、川崎、札幌、福岡の3市が政令指定都市になった昭和47年からスタートし、昭和47年の分区に向けての経緯、特に区名制定のいきさつを紹介しました。区名選定委員会ができ、歴史的簡潔他区と紛らわしくないという3つの原則が決められ、市民の意見を反映しようということ、一般公募をし、柿生区と麻生区に絞られ、歴史学者の意見も聞き、一票差で麻生区になったということです。

中島氏は区名制定のいきさつの裏話として、柿生区になると高石・細山には柿生村に合併されたという感じを持つ人がいるので、何度も話し合いをもったという裏話を暴露したあと、公務員を辞めて新しい街造りに取り組んだこと、新百合ヶ丘駅が全く何もない山の

中に出来たために今日の活気がある街づくりが進んだことを話しました。

小島氏は、昭和25年の頃の柿生地区は農村だったが、昭和30年から35年に、いわゆる乱開発がはじまり、農家が土地を売るようになったが、鈴木新之助という人が、農業と良好な宅地の共存を願って農住都市構想を提唱した。その名残が地権者による土地整理組合で、幸い大手が良心的な開発をしたことが、今につながっているが、現在、開発と農業と自然保護をどうバランスをとるかで、農家の方が悩んでおられることを話しました。

山田氏は、細山地区には本来、農民同士が助け合う「結」という仕組みがあったこと、細王舎という農機具会社が出来、開発した足踏み式脱穀機は、全国に普及、さらにはアジアまで普及させたこと、神奈川県唯一のモデル農村に指定されたことなどを紹介したあと、細山に都市化の波が押し寄せたと、地権者の姿が消えないような開発を掲げ、土地整理組合を結成、造成に当たって地権者には55%が残るよう造成、細山郷土資料館を作ったことなどを披露しました。

最後に滝峠氏からは、平成5年に川崎市総合開発計画ができ、これに沿って、マイコン地区、駅周辺商業地区の整

備がすすんだこと、平成17年に川崎厚生フロンティアプランができ、新百合ヶ丘地区は魅力ある広域拠点形成が謳われ、芸術文化施設の整備が図られたことなどが紹介されました。今後は、調整区域緑まちづくりをどう融合させるかという課題の解決に向けた関係者の連携が必要と語りました。

第2部では、区制30周年記念合唱団による「かがやいて麻生」の合唱の後、「麻生区のこれからを語る」伝統と歴史をふまえて」という討論が行われました。西村氏からは、麻生は他地域の方が住みたい街になっている。今後もある街にしてほしいと要望しました。中島氏からは新百合ヶ丘を交通の拠点にすることでもっと発展するだろうと、地下鉄の延伸などにふれました。小島氏は自分の街を改めて振り返って見ることが自然保護につながるのではないかと指摘しました。山田氏は「現在の自分というものは今までのすべての人たちからの贈り物である」という言葉を大切にしたいと述べました。滝峠氏は、安全安心で若者が住みたくなる魅力ある街づくりを進めることが重要と締めくくりました。

はじめて聞く話も多く、麻生を知る良い機会になりました。

(写真と文 佐藤勝昭)

# 「麻生童謡をうたう会」20周年を迎えて

麻生童謡をうたう会 代表 菅原 敬子

「麻生童謡をうたう会」は平成4年初代会長大山正幸氏のあつい思いを實現させる形で発足しました。日本の四季おりおりの風景や生活を歌った童謡・唱歌・日本の良さを次世代へ伝え残していこう。

二、歌うことを通して、地域や社会と連携をもつていこう、というものです。指揮者は山本佳世先生(初代坂口重泰先生)、伴奏者は石田洋子先生です。

当時、麻生小学校の体育館が地域に開放されることになり、練習会場として土曜の午後借りることができました。夏は暑く蚊に刺され、冬は寒



くホカロン、オーバーを着込んでの練習でした。現在は冷暖房完備の柿生小音楽室や貸しスタジオで

す。当時を思い出し話題にしています。

この間地域では聖マリアンナ病院でのコンサートや東日本震災復興支援や慰問コンサート、小学校、障害者や高齢者施設、麻生音楽祭、合唱フェスタ、サークル祭、七草粥への出場や協力等、年間を通して数多く活動してきました。

又、海外での公演や海外の方々のコラボレーションも行ってきました。どの施設でも、一緒に歌い聴いてくださった方々が涙を流し、懐かしく元気をもらいました、という声に、私たち自身が大きな力を頂いてきました。

昨年9月、インド・ネパールの学校や孤児院等で子どもたちの生活、学校環境が整っていない状況を目の当たりにし、日本の子どもたちがいかに恵まれているかを強く感じさせられました。しかし子どもたちは学校に来られるだけで充たされており、元気に目を輝かせ一緒に歌一杯歓迎してくれました。

団員一同、涙なしには歌えない程の感動を頂きました。

20年経つ中、団員も年齢を重ね亡くなられた方もおられますが、この会に入って良かったと言ってくださる方々ばかりです。歌声は益々若く、美しいハーモニーを奏でられるようになりました。この5月3日、アルテリツカユリホールで行われる童謡・唱歌で綴る「多摩の里山コンサート」へ依頼され出演することや、6月11日聖マリアンナ病院でのコンサート、7月の音楽祭に向け、現在練習に励んでいます。

「童謡は心のふるさと、歌を歌えば心も和む」。心も若々しく素敵なハーモニーを奏でられるよう心がけています。

### ～海外での出演・交流のあらまし～

- (1) 1995年11月川崎市友好都市ザルツブルク市へ「JAPAN WEEKかわさき」公演
- (2) 1997年5月ザルツブルク市民合唱団川崎へ 親善・コラボ
- (3) 2000年3月ザルツブルクへ音楽交流訪問・小学校・ミラベル宮殿歌披露
- (4) 2002年7月ザルツブルクの高校生川崎へ 親善交流
- (5) 2004年3月イタリア文化を学ぶ 交流の旅
- (6) 2006年3月スペイン文化を学ぶ 交流の旅
- (7) 2007年7月ハンガリー・スロバキア(7都市)へ公演「12国国際・民族声と舞踊のフェスティバル」
- (8) 2008年5月韓国昌原市女声合唱団招へい、ホテルモリノ、B21にてコラボ
- (9) 2010年9月トルコ・エジプトへ「2010トルコにおける日本年」歌の披露
- (10) 2011年9月韓国へ、昌原市女声合唱祭ゲスト出演 富川市小学校歌の披露
- (11) 2012年9月インド・ネパールへ「2012年日本・インド国交樹立60周年記念インド・テリヤパンデー」出演、小学校・孤児院交流

## 編集後記

昨年は文化協会にとって忙しい1年であったといえる。例年の行事に加え、10月5日には文化協会主催で区役所の共催による麻生区立30周年事業として「麻生区の30年の歴史とこれからを語る」と題してのパネル討論会が行われ、10月21日には文化協会が協力して「禅寺丸柿サミット」が行われた。会長をはじめ、会員の多くがこの二つの催しの成功のために奔走した甲斐もあり、成功裏に終えることができた。来年の11月には文化協会創立30周年になり、また忙しくなりそうである。(岩田記)

畔田 二郎・岩田 輝夫・小田島 寛・佐藤 勝昭・関森 田鶴子・千坂 隆男・橋本 周

麻生区文化協会会報

からむし 第五十四号

平成二十五年三月三十日発行

発行人 麻生区文化協会

会長 菅原敬子

編集 麻生区文化協会

広報部

川崎市麻生区万福寺一―五―二

麻生文化センター内

〇四四―九五―一―三〇〇

印刷 (株) エリアブレイン